Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2005, Vol.15, 65-79

論 文

音楽科教育における和楽器指導の一試案
～箏の指導を通して～

日 吉　　武〔鹿児島大学教育学部(音楽教育)〕

A Tentative Plan for Japanese Traditional Musical Instrument Instruction in Music Education : Through the Teaching of the 箏(Koto)

HIYOSHI Takeshi

キーワード：和楽器、箏、出前教室、実演家、表現と鑑賞の関連

1．はじめに

平成10年12月に告示された学習指導要領で、我が国の伝統音楽についてより積極的に指導する方針が示されたのを受け、今、学校現場では、和楽器を積極的に取り上げた授業実践が数多く展開されるようになっている。しかし、それらの取り組みには多くの課題が立ちはだかっている。

(社)日本芸能実演家団体協議会〔以下、略称「芸団協」で記す〕が、2002年に行ったアンケート調査[*1]によれば、教師が和楽器授業を行うにあたっての不安点として、予算がないこと、実演家との事前打ち合わせを持つこと、学校内や実演家との事前調整への不安などがあげられている。また、授業に関わったことのある実演家の側からも、楽器の調達、プログラムの工夫、教師側の勉強不足などが問題点として指摘されている。

このように不安や問題点が多い和楽器授業の取り組みであるが、我が国の大切な伝統音楽を、少しでも充実した内容で児童・生徒に教育したいというのは、多くの教師が願っていることである。先のアンケートでも、和楽器授業を行うにあたり実演家に協力してもらいたいという教師は、97.3%にものぼっている。学校の教室で、あるいは音楽室で実演家の生演奏が聴けるだけで、児童・生徒の目の輝きが違うであろうことは、想像に難くない。

本論は、上記のような課題を踏まえつつ、義務教育課程である小中学校での和楽器指導の位置づけを検証するとともに、特に箏について取り上げる意味を明らかにし、また筆者が前勤務校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校の２年生で行った授業実践の分析を通して、和楽器指導のあり方について一つの試案を提示することを目指したものである。

2．小中学校の音楽科教育における和楽器指導の位置づけと箏

(1) 小学校・中学校学習指導要領における和楽器指導の位置づけ

和楽器の扱いについて現行の小学校学習指導要領では、「第３　指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の中で次のように書かれている。[*2]

ア　各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、我が国や諸外国に伝わる様々な楽器を含めて、演奏の効果、学校や児童の実態を考慮して選択すること。

エ　第５学年及び第６学年で取り上げる旋律楽器は、既習の楽器を含めて、電子楽器、我が国や諸外国に伝わる楽器などの中から児童の実態に応じて選択すること。

このように、小学校では、取り扱いを選択できる楽器としてあげられているわけである。もちろん、選択だからといってまったく取り扱わないというのは、正しい方向性ではない。指導要領の解説でも「器楽の学習で取り扱う楽器の選択幅の拡大」[*3]を改訂の要点としてあげ、「和太鼓など我が国に伝わる打楽器　～中略～　についても、他の打楽器と同様に各学年を通して取り扱うよう心掛けることが大切である」[*4]としているし、また

５，６年生における旋律楽器の選択についても、「箏、尺八、三味線、篠笛など我が国に伝わる楽器　～中略～　児童が興味・関心をもち、豊かな器楽表現を楽しむことができるものを選択することが大切である」[*5]とし、具体的な楽器名をあげて選択への注意を喚起している。

一方、現行の中学校学習指導要領では、「第３　指導計画の作成と内容の取り扱い」の中で次のように書かれている。

「また、和楽器については、３学年間を通じて１種類以上の楽器を用いること」[*6]

この記述は小学校よりもさらに一歩踏み込んで、必ず和楽器を取り扱うことを明記したものであり、改訂の中でも大きな変化の一つであった。

以上のような、現行指導要領への改訂を受けて、学校現場の和楽器指導が積極的に行われているわけであるが、それでは次に和楽器指導の教育的意義と、また特にその中でも箏を取り上げる意味について考えてみたい。

(2) 和楽器指導の教育的意義と実演家

日本の伝統音楽の特徴には、音色の美しさ・多様さ、噪音の効果、余韻の効果、単音の美の追究、西洋音楽とは違う胸声の強い発声等があげられる。

このような特徴の中で、筆者が和楽器指導の教育的意義としてまずあげるのは、生で日本の伝統音楽、特にその音そのものの特徴（音色、噪音、余韻）にふれることができるということである。

日本の伝統音楽の持つ特徴として、音色の美しさ・多様さは特筆に値しよう。日本音楽では楽音だけでなく噪音や余韻を美として含むところが大きな特徴であり、伝統的に大事にされてきているのである。千葉優子は、西洋音楽と比較して「日本音楽ではむしろさまざまな音色をじゅうぶんに味わうところに真髄がある」[*7]と述べているが、そのような音色の美を感じ取らせることは、児童・生徒の感性を豊かにすることにつながる。

また山内雅子は自身の授業実践の分析を通して、子供たちの「日本の音楽のよさ」のとらえについて、次のような指摘をしている。[*8]

「子供たちの記述が一番多かった〈音色〉については、実際に箏を弾く活動の中で、感じ取った素直な感想であると推察できます。」「私が初めて音楽授業に箏を導入したとき　～中略～　楽しかった理由の第２番目が、箏の音色がきれいだからというものです。」「この５年生も　～中略～　〈音色の美しさ〉を１番好きなところとしてあげています。」

これらの指摘から、児童・生徒も音色について敏感に感じ取る傾向が強いことがうかがえよう。音色そして噪音や余韻を含めた音そのものの特徴を味わわせることこそ、日本の伝統音楽を教育する上で、まず目指すべきものではないだろうか。

それは、もちろん鑑賞で聴取することはできるのであるが、やはり目の前で実物の楽器から発せられる音に優るものはない。そこに、和楽器に実際にふれながら学習する大きな意義がある。

先にあげた特徴の残り、単音の美や発声についても、和楽器指導の中で学ばせることができるが、これについては、音楽教師だけの力では限界が生じる。ここに実演家が音楽科教育に加わる大きな意味が生じると思う。

一般には和楽器のより深い部分について自信をもって指導できる教師は多くはない。研修等で努力してはいるが、それにも限界があろう。先に述べた音そのものを味わわせる活動を行うにも、そこに実演家の協力があれば、その教育的効果は計り知れないものがある。実演家の授業参加こそ、和楽器指導の充実には欠かせないものである。

さらに和楽器指導の意義としてもう一つ、和楽器に向かいそれを奏する体験を通して、日本の伝統音楽が持つ精神性や特徴を学べるということがあげられよう。山内も述べているが[*9]、伝統音楽にも数多くの種類や流派があるので、そのすべての細かい流儀や特徴を学習することは困難である。しかし、礼儀作法などを含めた根本にある「こころ」を大切にさせ味わわせることは音楽科教育ができることである。

ただ、楽器にふれさせ音を出させることは簡単ではあるが、それだけでは日本の伝統音楽を味わったことにはならない。また、映像の鑑賞で学習しても、それは聴体験や知識の獲得にはなるが、やはり児童・生徒の心に真に日本の伝統音楽が近くなったとは言えないであろう。実際に和楽

器を目の前にし、それと向き合い礼儀作法や精神性を大事にし体験しながら奏させることが大切である。ここでも実演家が授業に加わる意義は大きい。日本の伝統音楽の「こころ」を、まさに直接その態度や演奏を体験して学ぶことができるからである。

(3) 和楽器指導に箏を取り上げる意味

教育的意義の多い和楽器であるが、では、多種多様な和楽器が存在する中で、箏を取り上げるということにはどのような意味があるのか、次にみてみたい。

箏が和楽器指導にとって優れている点としてまずあげられるのは、箏の音楽が先にあげた日本の伝統音楽の特徴のすべてを網羅していることである。音色の美、噪音、余韻はもちろん、単旋律を奏でることが多い点で単音の美の追究もあり、また楽器を奏しながら唄う曲もある点で、発声を体験することもできるのである。

さらに付け加えれば、箏は音の重なり合いを使うこともあるので、単音の美だけでない日本の伝統音楽の表情を味わうこともできる。

音を出すことに困難さが伴わないことも魅力である。他の楽器の場合、技能が高まらないとなかなかその楽器の本質的な音色が出ないが、箏はとりあえず弦をはじくだけでも、音色の美しさを味わうことができる楽器である。

このような音楽授業における箏の魅力について、山内は次の６点をあげている。[*10]

○音色の美しさが魅力ある音として、現代の子供の心を引きつける。
○平易に演奏できるため、学習の達成感が得られやすい。
○一面の箏を用いて２人のあるいは３人で行うアンサンブルによって、児童生徒相互のコミュニケーションが広がるとともに、アンサンブルの力を効果的に養うことができる。
○発音原理がシンプルで自分たちの自由な発想でさまざまな演奏上の工夫をしていくことができるため、音楽をつくって表現する活動の表現媒体として、大変適している。
○一つ一つの音を指で弾いて出すため、体で響きや余韻を実感でき、表現する喜びを直接味わえる。
○正座で、一つ一つの音に心を込めて弾く活動を通して、日本の伝統音楽に込められた精神性を感じ取ることができる。

実践に裏打ちされた的確な指摘である。最後の精神面の指摘も、まったくその通りであって、他の和楽器にも共通するものとして学習することができる。

このように和楽器指導にとって利点の多い箏であるが、学校現場の視点で見るといくつかの問題点はある。一点目は、楽器として大きい部類に入るので、保管場所の確保が大変だということ。二点目は、経費の問題として生徒全員分の箏をそろえることが困難ということ。三点目は、箏の爪をそろえるという問題である。指の太さに個人差があるので、各個人にそれぞれ合う爪を用意することは大変難しいのである。

しかし、これらの問題点も、廊下に保管場所を確保したり、複数の児童・生徒でグループをつくって一面の箏を使用したり、とりあえず親指のみいろいろな太さの爪を用意して対応するなどの対策は可能であろう。

上述したような問題点はあっても、それを補ってあまりある教育楽器としての効果が箏とその音楽には備わっている。それ故に、筆者もこれまでの教育実践の中で箏を取り上げてきた。

３．授業実践の概要

(1) 授業設計にあたって

これまで述べてきたような、和楽器の学習指導要領上での位置づけやその教育的意義、実演家との協力の必要性、箏の利点を踏まえ、中学校における和楽器授業の実践を試みた。

授業設計にあたっては、ただ箏を弾けるようにして終わりなのではなく、まず何よりも表現と鑑賞の活動を関連させた内容にすべきだと考えた。実演家に授業参加していただければ、当然彼らの生の演奏を鑑賞させることがすばらしい学習活動になるし、他の鑑賞教材を活用することで箏以外の和楽器と関連づけた学習もできるからである。

和楽器の取り扱いについて、例えば教育課程審議会はその答申の改善の具体的事項で「我が国の伝統的な音楽文化のよさに気付き、尊重しようとする態度を育成する観点から、和楽器などを活用した表現や鑑賞の活動を通して、我が国や郷土の伝統音楽を体験できるようにする」[*11]という方針をあげている。また中学校指導要領の解説[*12]では、「和楽器を用いるに当たっては、常に学校や生徒の実態に応じるとともに可能な限り、郷土の伝統音楽や伝統芸能を取り入れることが肝要」とあり、また「和楽器を表現活動における器楽の指導に用いることはもちろんであるが、歌唱や創作、鑑賞との関連も図りながら、実際に和楽器に触れ、体験することで、我が国や郷土の伝統音楽の学習効果をさらに高め、充実させていくことが期待できる」とある。表現と鑑賞を関連づけ、様々な学習活動を展開することは、これらの改善の方向性にも合致する。

そこで本実践では、生徒の実態に合わせた上で、可能な限り郷土に関わった楽曲も取り上げ、歌唱・創作・鑑賞との関連を生み出すよう工夫した。また、その工夫の一つとして芸団協が提供している「出前教室」を利用した。これについては後の項でふれていくこととする。

(2) 実践校について

本実践は、筆者が前勤務校、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校（以下、附属鎌倉中学校と略す）で行ったものである。

附属鎌倉中学校は、神奈川県鎌倉市にある。全校生徒は男子261名、女子255名の計516名（2004年５月１日現在）、各学年４学級、計12学級の学校である。

本実践は第２学年174名を対象に行った。

(3) 題材について

附属鎌倉中学校では、以前より箏を導入した伝統音楽の学習に取り組んでいた。しかしそれは箏に親しみ、「さくらさくら」の旋律を弾けるようにする程度に止まっていたのが実態であった。また鑑賞においても日本の伝統音楽を題材に設定してはいたが、教材であるＬＤの視聴に止まっていた。

そこで、芸団協の出前教室を利用してそのような状況を打破する授業設計を試みた。附属鎌倉中学校の生徒は、箏に対する関心はもともと高いものがあるので、実際に実演家の先生方から教わり、その演奏を生で鑑賞する機会を与えることで、さらに興味・関心を広げ、意欲をかき立てることができると考えたからである。

また、附属鎌倉中学校は合唱活動がとてもさかんな学校である。生徒たちも歌声を発することにそれほどの抵抗感は覚えない。そこで、生徒の持っている力を生かしながら、より積極的に授業に向かわせることを意図し、箏に歌をからめた学習内容を計画した。

具体的には、日本の伝統音楽を深く味わう学習として、出前教室を中心に、「さくらさくら」による器楽と歌唱の学習、箏曲「江ノ島」の一部を使った伝統的歌唱の学習、「さくらさくら」にアレンジを加え発表する創作の学習、そして箏に尺八を加えた鑑賞学習を実施することとなった。

(4) 指導計画

本実践は、次にあげる三次にわたる指導計画に基づいて行った。

○第一次

第１時：箏についての基礎的な内容の学習。基礎的奏法の習得。

第２時：「さくらさくら」の練習。歌唱を伴う演奏の体験。

○第二次（出前教室として実施）

第１時：伝統的歌唱法の体験。「さくらさくら」の復習。奏法の学習。特別演奏鑑賞。

第２時：グループごとに後奏創作。グループ別発表会。特別演奏鑑賞。

○第三次

第１時：鑑賞授業〈日本の伝統音楽〉。
尺八曲「巣鶴鈴慕」，箏曲「六段の調」

出前教室は、２時間計画した。しかし、今回対象とした２年生は、それまで箏についての学習経験がまったくなかったので、出前教室をより有意義なものにするためにも、事前に基礎的な学習と経験を積んでおくことが必要だと考えた。そこで、第一次の学習として、箏への導入授業を２時

間行った。

また、日本の伝統音楽の鑑賞も毎年授業として取り上げているが、2004年度は、出前教室という特別な体験を活かすため、その授業との連続性を踏まえ、第三次として授業設定することとした。

(5) 指導目標

①第一次の指導目標

○箏についての基本的知識を理解させ、最も基本的な奏法に慣れさせる。

○「さくらさくら」の旋律を弾けるようにさせる。

②第二次（出前教室）の指導目標

○箏の音楽を実演家の先生方とともに体験することにより、日本の伝統音楽への興味・関心を高める。

○箏を弾きながら歌うときの発声、および箏の演奏を体験することにより、日本の伝統音楽の基礎的な唱法や箏の奏法に親しませる。

○箏の多様な奏法を理解し、その特徴を生かした創造的な表現をさせる。

○実演家の先生方の演奏を生で鑑賞させ、箏の音楽の美を味わわせる。

③第三次の指導目標

○第一次、第二次の学習を活かして、箏の音楽に対する理解を深めさせる。

○箏の学習で学んだことを活かしながら、尺八の音楽を味わわせる。

○箏と尺八を比較鑑賞することにより、日本の伝統音楽への理解を深めさせる。

(6) 芸団協「出前教室」について

正式名称は「実演家と教師による和楽器モデル授業出前教室」。芸団協が「伝統文化と教育」プロジェクトの一貫として2003年度より本格的に実施しているプランである。

プランの内容は、伝統芸能の実演家が中学校の教室を訪問し、音楽の先生と一緒に和楽器を使った授業を作っていくというもので、能楽、長唄、三曲の３ジャンルで実施している。生徒は、第一線で活躍する実演家の姿に接し、演奏の基本や表現スタイルの要素を学び、それらを活かした創作活動を展開することとなる。

本実践で実施した「出前教室」の概要を以下に記す。

・題材名　「ことうた」の魅力発見！

・授業実施日時

第１時　2004年９月７日（火）
　　１クラス１時間（50分）×４

第２時　2004年９月16日（木）
　　１クラス１時間（50分）×４

・対象学年学級

第２学年１組(男子22名，女子22名，計44名)
　　２組(男子22名，女子22名，計44名)
　　３組(男子21名，女子22名，計43名)
　　４組(男子21名，女子22名，計43名)

・場所　横浜国立大学教育人間科学部
　　附属鎌倉中学校　音楽室

・指導者　音楽科教諭　日吉　武
　　箏(実演家)　萩岡松韻先生
　　竹村岡桜先生
　　武藤松圃先生

・出前教室の授業展開　資料１参照

４．授業実践の成果

(1) 実践を振り返って

今回の授業実践にあたっては、指導計画の項でも述べたように、三次にわたる指導を展開した。

○第一次の指導

箏という楽器についての導入を行った。具体的には、楽器の構造の理解、爪をつける体験、柱をたて調弦をする体験、「さくら」の旋律を弾く練習、歌詞を歌いながら演奏するという体験である。

○第二次の指導

出前教室として行ったものであり、前項や資料１を参照されたい。

○第三次の指導

尺八と箏の音楽をＬＤで鑑賞する活動を行った。箏については出前教室の延長という位置づけとしたため、「六段の調」の映像による演奏鑑賞に重点をおいた。一方、尺八については、箏とはまた違う伝統音楽として紹介する形をとったため、楽器の構造や奏法についても詳しく映像で学び、その上で「巣鶴鈴慕」を視聴した。

また尺八の指導では、実際に教師が尺八の音を出してみせると同時に、楽器を生徒にさわらせて

いる。さらに、発音機構の似ている管楽器として、リコーダーとフルートを紹介し、同じ旋律を演奏して聴かせ、音の違いを聴取させることも行った。

１学期から２学期にわたる、時期をまたがっての日本伝統音楽の指導となったが、生徒には、楽器をさわってみるという直接体験から、実演家の先生方に教わり、その演奏を生で鑑賞するという貴重な体験、そしてプロの演奏を通して弦楽器に対比しての管楽器の学習もする、という多角的な学習体験に十分なり得た。

生徒のレディネスは、主に三つのパターンに分けられた。一つはまったくこれまで箏を経験したことのない生徒（141／174名）、小学校以前に箏に触れた体験のある生徒（14／174名）、そして中学校になってＬＩＦＥ（附属鎌倉中学校での「総合的な学習の時間」の名称）の国際理解領域での学習で箏について学んだ生徒（19／174名）である。

ワークシートの記述から見ると、次のことが言える。

○出前教室に関しては全生徒が「とてもためになった」「楽しかった」「すごかった」「勉強になった」と、その意義を大変肯定的に評価しており、否定的な意見は一つもなかった。

○第一次の授業以前に箏にふれた経験のある生徒については、経験の頻度が初体験の生徒よりあるという点で課題の持ち方や学習後の気づきもより具体的になり、一歩踏み込んだ学習ができている。

○箏以外に尺八の音楽も鑑賞で取り上げたことで、日本の伝統音楽に対するより幅広くまた深い見方、感じ方を養うことができた。

(2) 生徒の変容から

①箏についての体験のなかった生徒の変容例ｉ

学習に入る前、箏についての簡単な聴取の経験はあったが、楽器について触れた経験がまったくなかった生徒の変容について、一人の女子生徒の例を紹介したい。特に大きな学習成果が見られた例である。

第一次の授業後は次のような感想を述べている。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

次の弦でとめるというのがとても重要だと思いました。少し力の入れぐあいを変えると強さが全然異なってしまうのでとてもデリケートな楽器だと思ったのと同時に音のバリエーションがいろいろとできる楽器だと思います。

◆箏を体験してみて、難しいこと、苦労したこと、課題になることはありますか。

やはり強さだと思います。上記でも述べましたが力の入れ具合で雰囲気がガラリと変わってしまうところがとても大変で苦労してしまいました。

初めての体験ということもあり、「指の力の入れ具合」を気にし、「きちんと弾く」という方に強い関心が向いている記述である。

出前教室の第１時では次のような感想を持っている。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

心の中でイメージして弾くとおっしゃったことが一番心に残っています。授業中はただ弾くことに夢中でイメージすることができませんでした…。指摘していただくとうまくきれいな音がでるのですが、自分だけだとうまくいかない部分が多くイメージするに至りません。なので今の一番の目標は、もう少し余裕を持つことです。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

模範演奏を聞いてやはり合唱と同じくらい音の重なりが大事ということを実感しました。３人の方で弾いていただいた時に、３人とも違う音と違うリズムで弾いているのにすごく統一感がありました。歌もすごく的確に入っていたことにもとても感動してしまいました。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆今回の授業で学んだことや感じたこと、演奏家の先生へのメッセージなど自由に書いてください。

箏の音は普段あまり聴かないので、今回じっくり聴くことができてとても新鮮な感じがしました。特に先生方の演奏は音の重なりがとてもきれいで、歌がさらに違う印象をつくりだしてくれたと思います。

自らの弾いてみるという体験の上に、目の前での実演に出会うことで、箏の音楽に対する見方が幅広く広がり、また感じ方に深みも出てきた様子がよくわかる感想であろう。

このような広がりは、第三次の鑑賞授業の後、次のような記述となって結晶していく。

私は今回日本の伝統楽器にふれてみて、驚くようなことがいっぱいでした。特に箏は実際にふれて弾くことまでできたので、箏に対するイメージがとても変わりました。伝統楽器というのでとても弾くのが難しくきれいな音なんて出ないのでは？と思っていましたが、少し指先に力を入れて注意をいただいた部分に気をつけて弾いてみると、自分で弾いたとは思えないくらいのきれいな音がでました。もちろん、先生方に比べれば全くだめなのですが、少しだけ感動してしまいました。老後に趣味としてやってみるのはいいかもしれません。普段の生活では伝統楽器というのは自分からとても遠い存在だったので、とてもよい体験ができたと思いました。

尺八にはあまりイメージができませんでしたが、箏に対しては中能島様が画面の中でひいているのをみて「無理がない」と感じることができました。特に引き色の時がすごかったです。少し弦を持ち上げるという私達のレベルでは考えられないことをとても自然にこなしていました。やはりプロはすごいなぁ…と思うと同時に、あそこまでになるのにどれほどの努力をしているかという疑問を持ちました。

どんな天才でも努力をしなければ自分の力を維持することすらできなくなってしまいます。なので自分のできることを深めるためにあの方がどれほど努力しているのかを見て、自分のこの先に生かすことができたらいいなぁ…と思うような授業でした。

それまでの箏についての体験学習の成果をしっかり生かした鑑賞と、音楽の部分に止まらない感じ方、考え方の広がりが、大変すばらしい学習成果となって現れている好例といえよう。日本の伝統音楽というものへの関心も、確かなものとして身に付いていると思われる。

②箏についての体験のなかった生徒の変容例ii

この女子生徒は、レディネスとして「家の近くにくる豆腐屋さんの音楽（スピーカー）」という箏の音の聴取体験を持っていた。各授業における記述を追ってみよう。

第一次の授業後の感想。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

私はまだそのような音は出せませんが、先生やうまい人が弾くと、深みのある、平安のころの日本の音がして、気持ちいいな、と思いました。私も、聞いている人が平安時代、桜の散る都へとんでいってしまうような、そんな演奏ができたらいいな、と思いました。

楽譜にも日本独特の工夫があるな、と思いました。私は今まで５線のもので、音符の並んでいるものしか知らなかったけれど、琴で使った楽譜もわかりやすくていいと思いました。

◆箏を体験してみて、難しいこと、苦労したこと、課題になることはありますか。

爪がすべってしまって、うまく下に弦を押して「ビン」と音をたてるのが難しいです。できることにはできるけれど、ミスしてしまうときが多いので気をつけて弾いていきたいです。あと、１回まちがえるとパニックになってしまうので気をつけたいです。

出前教室の第１時での感想。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

いつもの音楽では、同じ音を歌っているときに音程を上げたり下げたりしてはいけないけれど、ことうたの場合は逆で、そうやることによって日本的な響きになっていると思いました。でも、おなかのそこから声を出したり、口をはっきりあける（初心者だけらしいけど）ところなど、共通点はたくさん見つかりました。先生のように、上がったり下がったりするときの感じを出すのが大変でした。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

箏というと、伝統的な文化で、喧しいきまりごとがいくつもあって、弾き方もこれしかだめ……というイメージだったのですが、本当に技法、というかやり方が数多くあって驚きました。よく身近にあるバイオリンやフルートなどよりも音を出すのは簡単だし、表現が色々できる楽器だな、と思いました。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆他のグループの発表を聴いて気がついたこと、感じたこと、考えたことを書きましょう。

１台の箏に２人の人が座って、お互いにひいていたり、３人くらいで「さくらさくら」の歌をかえるの合唱みたいにおいかけっこしたり、日本の伝統文化が２－１にとけ合っているな、と思いました。いつの間にかみんな、座り方もバラバラになっていたけれど、文化を知った上で、また新しい箏をつくっていくのもいいな、と思いました。

◆今回の授業で学んだことや感じたこと、演奏家の先生へのメッセージなど自由に書いてください。

今回の授業で日本の伝統的な音楽を知って、ことうたの声の出し方など、今後やっていく歌に役立ちそうなことがたくさんあったし、逆に、今の音楽にはないところを知ることができ、楽しかったです。伝統文化は、昔から受けつがれてきた技法などを知るのはもちろんですが、今の私達でも、箏の表現方法を考えたりして新しい箏を作ることができるのを知りました！

第三次の鑑賞授業の後の記述。

尺八での演奏の、「巣鶴鈴慕」は、すごく長かったけれど、その中にたくさんの技法の組み合わせがあり、聴いていてあきない曲でした。すごくたくさんの音の出し方が、尺八にはあると知って、驚きました。また、ずーっと吹き続ける奏者の方の体力もすごい！しかも最後までなだらかに吹いていたし、あれの何倍もの時間吹き続けるなんて。首がいたくなりそうです。

箏の演奏、「六段の調」は、いつも家の前を通る豆腐屋さんが流している曲で、前から何の曲なのか気になっていたけれど、あらためて映像つきで聴くと、また一段ときれいで響く音でした。尺八にしか出せない音、箏にしか出せない音、そして個人にしか出せない音。日本文化というのは、ほんとに奥が深いと思いました。

この生徒の場合は、自分たちが今まで体験してきた西洋音楽の学習との相違点や共通点に注目しながら、箏の音楽を中心に「文化」という広い視点で自分が関わっている音楽をとらえなおそうとしている点がすばらしい。日本の伝統音楽を中心に据えた今回の指導展開が、音楽を文化として見つめ直すという成果を生んだ例と言えよう。

③箏についての体験のなかった生徒の変容例iii

この女子生徒は、レディネス調査で箏に触れた経験もその音楽を聴いた経験もないと回答しているが、興味深いとらえ方をしているので紹介する。

第一次の授業後の感想。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

今までの鑑賞の授業で聞いてきた、オーケス

トラのような音とは全然違い、すごく日本っぽいなーと感じました。

箏をひいたのは初めてだったので、こんなに長い時間、箏の音を聞いたのも初めてでした。私は箏の音色がすごくきれいだと思います。日本人だからなのか分からないけど、聞いていてとても落ちつきます。

これから、ひく機会があれば、さらに箏からきれいな音色が奏でられるようにしたいです。

出前教室の第１時での感想。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

今までで、あまりお琴の授業をしてなかったので、先生の演奏を聞いた時は、とてもすごいと思いました。とても日本らしくてすばらしい楽器でした。リコーダーよりやわらかい感じの音だと思いました。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

すごく和音がきれいな音だと思いました。どれもやわらかい音でした。ピアノとかと比べて、小さな間奏だけど、そこがまた良いと思いました。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆今回の授業で学んだことや感じたこと、演奏家の先生へのメッセージなど自由に書いてください。

先生方の演奏はとてもすばらしかったです。音がきれいだし、工夫も多くてどれもうらやましいです。

第三次の鑑賞授業の後の記述。

私は、この授業で初めて尺八を聞きました。とても日本らしくていい音だな、と思いました。箏の音の日本らしさとはまた違う、日本らしさだと思いました。

リコーダーやフルートの音もきれいだと思うけど、なんだか強い息のような感じがします。それに比べて、今日聞いた２つの楽器の音は、やわらかい息のような感じで、私はこっちの方が落ち着くと思いました。どの国の人が聞いてもそう感じるのかもしれないけど、とくに日本の人は心を落ち着かすことができるのではないかな、と思いました。

この生徒の場合は、音色というものに強い関心が向いていて、西洋音楽の楽器との比較の中で、箏や尺八の音楽をしっかりととらえている。「やわらかい」という表現で、日本伝統音楽の音を表しているのがおもしろい。まったく未体験であったことを考えれば、実演にふれたり、鑑賞学習の成果などを通して、日本伝統音楽によりよい出会いができた例である。

④箏についての体験のなかった生徒の変容例ⅳ
～帰国生の事例～

この女子生徒は、レディネス調査で、箏に触れた経験もその音楽を聴いた経験もないと回答している海外帰国生徒である。

第一次の授業後の感想。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

初めて箏という名前を聞き、見ました。初め、とても難しそうだと思いましたが、爪をつけて実際やってみると意外と簡単でした。番号通りの楽譜を読み、その弦をはじきます。（？）しかし、弦をはじき、となりの弦まで爪をもっていき止めるというのは少し難しかったです。音色が昔の日本っぽい感じがしました。

出前教室の第１時での感想。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

ことうたは普段私たちが行っている発声とは

違い、私は和風っぽいという印象をもちました。声をふるわせたり、同じ音で音程を変えたりなど、私が実際歌ってみたところ、とても難しい技能があるコトを知りました。箏を演奏しながら歌うのは難しいと思いました。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

箏で円を描くように等、予想もしなかった弾き方に驚きました。先生が弾くととてもキレイなんですけど、私が出来るか少し不安です。しかし、低い音から順に高い音を弾く技法はチャレンジしてみたいです。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆今回の授業で学んだことや感じたこと、演奏家の先生へのメッセージなど自由に書いてください。

初めて箏というものを見て、弾いてみて改めて日本っぽいと感じました。とてもムズかしかったけれど、演奏してみて箏のイメージが変わりました。

第三次の鑑賞授業の後の記述。

今回、初めて詳しく尺八についてと箏について学びました。尺八は見たこともなくさわったことも今までありませんでした。なので今回見てさわることができ、良かったです。尺八も箏も難しい技法ばっかで、簡単だと思っていたら、とても難しそうでした。（箏は難しかったです。）箏は一回授業でやったので、映像を見ていて、「輪連を使っている」など分かって楽しかったです。日本の楽器（？）は日本独特な感じが出ていると思いました。他の日本の楽器も見て、演奏を聞いてみたいと思いました！！！

箏も尺八もまったく初めての出会いだったわけだが、それだからこそ、初めに実物に触ってみて、弾いてみるという体験から入ったのが、良い方向に作用したと思われる。最初から鑑賞だったとしたら、ここまで具体的な感じ方をできていただろうか、と考えさせられる。やはり、目の前で実物に、まして実演に出会うことは大事だ、とあらためて思わされた例である。

⑤箏について体験のあった生徒の変容例ｉ

この男子生徒は、総合的な学習の時間［ＬＩＦＥ］の国際理解領域で箏を学習する体験を２年連続積んでいる生徒である。各授業における記述を追ってみよう。

第一次の授業後の感想。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

箏は、音を鳴らすのは簡単だが、その音色は、弾く人の気持ちや思っていることで良い音と悪い音の両方が出てしまう、という感じがしました。

◆箏を体験してみて、難しいこと、苦労したこと、課題になることはありますか。

良い音を出す。ということがとても難しいと思います。音を出すのは簡単だが、その１つの音にどれだけ心が込められるか？ということが課題です。

体験を積み、「さくらさくら」もすでに弾ける力を持っているので、次の課題として「音の質」に関心が強く向いている。その観点から、他の生徒の演奏もとらえようとしていることがわかる記述である。

出前教室の第１時での感想。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

演奏を聴いていて、箏の世界に吸い込まれていくような感じがしました。特に、三人の箏の動きが、静かに流れるようだったり、速いスピードだったりと、変化がとてもすごかった。

和・洋問わず、「お腹から声を出し、口先からは発声しない」と同じだったので、重要だと思った。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

同じ曲を演奏しても、ちょっとした技法を取り入れるだけで、より引き立つものになるので、どういう工夫をし、奏でるか？ということや、何を思って弾くか？に重点を置きたいと思う。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆他のグループの発表を聴いて気がついたこと、感じたこと、考えたことを書きましょう。

どのグループでも、様々な工夫があり、とてもおもしろい創作演奏だったと思います。引き連一つでも、感じるイメージが違い、同じことをやっていても、一つ一つ違う感じがしました。(それぞれの良さがでている)

いかに演奏すると良いのか、またそれを自分の演奏に取り入れるにはどうすればよいのか、という高い課題意識を感じる記述である。実演家との出会いが、生徒の音楽をよりよい方向に、それもより深く高い方向に導いていることを感じさせる。

聴く耳も大変よく培われていると言える記述である。

第三次の鑑賞授業の後の記述。

フルートなどのすんだきれいな音も良いが、今回の尺八のように、わざと音をかすれさせたり、音をふるわせたりする文化もおもしろいと感じた。

微妙な音の変化がつくことで、音楽に独特の世界ができ、深みのある曲ができていて、非常に魅力的だと思う。

箏曲では、弦を弾く強さや、スピードによってイメージが変わり、神秘的な感じから、力のある感じまで、様々な表現ができ、おもしろいと思った。

音や音楽の質に注目するという観点がしっかりと培われているので、微細な点にまで注意して聴き取ることができている。また、音楽を文化としてとらえ、差異を平等にとらえるという感性が育っていると思われる記述である。

⑥箏について体験のあった生徒の変容例ii

最後に紹介するのは、「小５の時にクラブ活動や地域の人たちと伝統を楽しむという授業の時に（箏を）弾きました」というレディネスをもつ女子生徒の記述である。つまり、今回のような実体験を伴ったカリキュラムをすでに体験して、この題材に臨んだ例である。

第一次の授業後の感想。

◆今回２回箏の勉強をしてみて、気づいたこと・考えたこと・感想などを書きましょう。

久しぶりに箏を演奏することができとても楽しく興味深く授業を受けることができました。また、音の調整は、やったことがなかったので、少し難しかったです。たとえば、柱を入れて立てることが難しかったです。小５の時に使ったのは、丸爪だったので今回使った爪と比べることができました。自分的には今回使ったほうがやりやすいなと思いました。

◆箏を体験してみて、難しいこと、苦労したこと、課題になることはありますか。

爪を、次の弦で止めるところに苦労しました。また、このことは次回の課題にもなると思いました。

体験があるだけに、授業への満足度を高めるのは容易ではないが、前の時に経験していない調弦の実践や、爪の種類が変わることなどで、具体的な学習成果をもてていることが分かる。

出前教室の第１時での感想。

◆ことうたの模範演奏を聴いたり、実際に発声をしてみて、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きましょう。

合唱のときの発声と少しちがったので少し難しかったです。またおなかから発声していたので、声が箏に消されず聞こえていたので、驚き

ました。模範演奏を聴いて、私たちと演奏の流れが全然ちがっていて、情景が思い浮かぶような感じでした。

◆箏のいろいろな演奏技法や間奏の工夫について、気がついたこと・感じたこと・考えたことを書きとめましょう。

箏は、ただ演奏するのではなく、その曲の情景を表すものだと思いました。また、演奏技法によって鳥の声やさくらの散る様子を表すことができることを知ることができました。

演奏が呼び起こす心の情景に思いが至っているのは、事前に体験を持っている故に、音楽のとらえに幅をもてているからではないだろうか。次にあげるように、この生徒は創作へ向けての課題の立て方や、創作時の工夫にも具体性が見られる。

◆特に自分が挑戦してみたい間奏の工夫は……

さくらが散るような風が吹いているようにしようかと考えました。また、ゆっくりやったり速くひいたりと速度を変えてみたりしようかと思いました。

◆間奏の創作で工夫したこと、こだわったことなどを書きとめましょう。

初めはさくらが散るようにして、連を速さを変えてだんだん音を大きくしていきました。最後は、和音を使って春の不思議な感じを出すようにしました。

また第２時の授業後には、次のような感想が見られた。

◆他のグループの発表を聴いて気がついたこと、感じたこと、考えたことを書きましょう。

ほとんどのグループが初めに使うものが同じだったと気がつきました。また、演奏中にさくらとはちがう音？伴奏みたいなものをつけると、情景が浮かびやすいように思いました。

◆今回の授業で学んだことや感じたこと、演奏家の先生へのメッセージなど自由に書いてください。

今回の授業で、今まで知らなかった本当の箏のことを知ることができたと思いました。初めて箏を演奏してみたときは、すごく緊張しましたが、だんだんと緊張がとれて楽しく？演奏することができたんじゃないかと思いました。今度は、三味線などにもふれることができたらうれしいなと思いました。

小学生の時の体験をしっかりとベースとしてもち、その上に今回の授業での学習をとらえているので、音楽への考え方が深まっていると言えよう。また他の和楽器への興味・関心も呼び起こされている。そのことは、次にあげた第三次の鑑賞の授業における記述でも感じられる。

・初め「巣鶴鈴慕」を聴いた時、音がかすれるところが何度かあり、よくまちがえているなと思っていたのですが、わざとかすれさせていたことを知って、すごいと思いました。
・尺八は、リコーダーと同じような演奏をしているのかと思っていました。でも、尺八もリコーダーも全然ちがう演奏をしていました。リコーダーは指がずれたりすると汚い音になるけども、尺八は、かすれさせる技法があるのでとても自然に聞こえました。
・箏の演奏を聴いて、やっぱり自分たちのような素人より達人（？）の方がすごいと思いました。
・日本の楽器と外国の楽器は、似ているようでちがうところがあるということを今回の授業で知ることができました。

５．まとめと課題

授業実践の成果から次のことがいえる。

○［器楽・歌唱の学習→出前教室による器楽・歌唱・鑑賞の学習→鑑賞の学習］という授業設計は、箏についての事前経験の有無に関わらず、生徒の日本伝統音楽に対する興味・関心を高め、感性を育むのに有効であった。

○実演家が授業に参加した出前教室の有効性をあらためて確認することができた。

○表現と鑑賞の関連を図った授業設計の有効性を

あらためて確認することができた。

出前教室については次のような課題と成果があげられる。

●「ことうた」については、実際には第１時で体験したのみで、第２時の学習にはあまり生きなかった。生徒の興味関心が、箏の奏法とそれを生かした後奏の創作に向いたためである。

●実演家の先生方に、４時間続きで授業をお願いすることは、かなりの負担になる。学校としては、このような授業はとても有意義だが、一回の出前教室での授業時数の問題は、今後も課題として残るものであろう

○第１時、第２時それぞれで、実演家の先生方のアンサンブルを鑑賞できたことは、生徒たちにとって大変な喜びであった。日本の伝統音楽への関心を高めることができた。

○授業の指導は実演家の先生方に負うところが大きかったが、場面によっては、教師による補足説明が必要なこともあった。やはり、その生徒をよく知っているその学校の教師が、適宜支援を行うことは肝要である。

○第２時は、創作授業としての色彩が濃いものとなった。創作体験が非常に少ない生徒たちであったため、教師としてはかなりの心配があったが、取越し苦労に終わった。箏を使ったということで、生徒の関心意欲も常に高く保たれており、結果的に大変有意義な創作活動になった。

出前教室のような展開は、音楽教師だけではとても無理なものであり、実演家の授業参加があって初めて可能になるものである。しかし、実演家だけに授業を任せきりにしても、また効果は薄いものとなろう。実演家と教師の有効な協働があって初めて有効な実践になり得る。

また、箏という楽器を核に、器楽、歌唱、創作、鑑賞のそれぞれの学習が有機的に結びついたことも、生徒の学びにとって大変有効であった。これは、今後、他の学習活動でも活かせる実践例と言えよう。

今後の課題としては、次の点をあげておきたい。

●箏以外の和楽器授業における授業設計の工夫。

●西洋音楽を中心とした学習活動への応用。

●実演家と教師の協働のあり方の検討。

【注】

＊１　(社)日本芸能実演家団体協議会：「実演家・学校の先生へ　授業に“和楽器”を」

＊２　文部科学省：「小学校学習指導要領（平成10年12月)」改訂版, 71頁

＊３　文部科学省：「小学校学習指導要領解説音楽編」, 教育芸術社, ６頁

＊４　同上, 77頁

＊５　同上, 78頁

＊６　文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月)」改訂版, 64頁

＊７　千葉優子：「日本音楽がわかる本」, 16頁

＊８　山内雅子：「音楽指導ハンドブック24　日本音楽の授業―伝統音楽のこころを大切にしてきく・うたう・おどる・かなでる・つくる」, 16頁

＊９　同上, 24頁

＊10　同上, 37頁

＊11　文部科学省：「中学校学習指導要領解説音楽編」, 教育芸術社, ４頁

＊12　同上, 71頁

【参考文献】

○文部科学省：「小学校学習指導要領（平成10年12月)」改訂版, 2004

○文部科学省：「中学校学習指導要領（平成10年12月)」改訂版, 2004

○文部科学省：「小学校学習指導要領解説音楽編」, 教育芸術社, 1999

○文部科学省：「中学校学習指導要領解説音楽編」, 教育芸術社, 1999

○千葉優子：「日本音楽がわかる本」, 音楽之友社, 2005

○山内雅子：「音楽指導ハンドブック24　日本音楽の授業―伝統音楽のこころを大切にして　き

く・うたう・おどる・かなでる・つくる」, 音楽之友社, 2001
○(社)日本芸能実演家団体協議会：「実演家・学校の先生へ　授業に“和楽器”を」, 2003

資料１　出前教室の展開

（１）第１時

時間	指導内容	生徒の学習活動	留意点
５分	導入	○担当教諭による授業概要の説明と実演家紹介を聞く。 ○歓迎合唱の披露。	○授業開始前に爪を配布。 ○箏は二人で一面。
10分	箏についての説明	○箏と山田流箏曲についての説明を聞く。 ○「さくら」の簡単な復習。	
５分	ことうたの歌い方の指導	○模範演奏「江の島の曲」一部を聴く。 ○「独吟」の部分のうたい方と拍子にあたる部分の歌い方の実例を聴き、模倣する。	○発声と箏の手法に注目させる。 ○箏の手は必要に応じて実演家が合わせる。
５分	「さくら」の復習	○「さくら」の演奏について復習する。 ○箏歌の発声を生かした弾き歌いに挑戦する。	○途中で生徒は入れ替わり、全員が体験する。
15分	創作活動のための素材提示	○「さくら」をベースに、後奏を工夫するやり方のモデル提示を聴き、体験する。 ・後奏（４小節程度）創作のポイント（手法，構成感，段落感等）の説明を聞く。 ・変化をつけるための手法のサンプル(トレモロ，スリ爪，連，ユリ色，後押し，左手の和音等）提示を受ける。 ・ベースラインの工夫や、少し高級なやり方についても提示を受ける。	○実際に箏にふれさせて体験させる。 ○ある程度の区切りごとに箏に触れる生徒を交代させる。
８分	模範演奏鑑賞	○実演家３名による模範演奏を鑑賞する。	○正座がつらい場合は、足をくずさせ、楽な姿勢で鑑賞させる。
２分	まとめ	○本時の振り返りを行い、次時の予告を聞く。	○「さくら」にアレンジを加える際のプランについて考えておくよう指示する。

（２）第２時

時間	指導内容	生徒の学習活動	留意点
５分	導入	○担当教諭による授業概要の説明を聞く。	○授業開始前に爪を配布。 ○箏は二人で一面。
５分	前時の復習	○「さくら」の簡単な復習を行う。交代しながら全員で合奏する。	○爪の当て方、位置、座り方、発声などに注意させる。
15分	創作活動と練習	○「さくら」につける後奏について、グループごとにプランをまとめる。 ○グループで発表できるよう練習する。	○前時で学んだ手法を使うよう促す。 ○実演家と教師でグループごとに助言する。
15分	発表会	○グループごと順番に発表する。 ・工夫点を代表が口頭で説明する。 ・演奏して発表する。	○実演家は一つ一つの発表に批評を加える。
７分	模範演奏鑑賞	○実演家３名による模範演奏を鑑賞する。	○正座がつらい場合は、足をくずさせ、楽な姿勢で鑑賞させる。
３分	まとめ	○本時の振り返りを行う。	○感想を発表したり、質問をするよう促す。